

近代日本文学にあらわれた僧侶像（四）

見 理 文 周

十四

文学と仏教との志向や次元が異質であるとは、世間における一つの通念であるが、このことを、あえて比較的な表現によって考察すれば、次のように言えるかもしれない。

文 学	仏 教
<ul style="list-style-type: none"> ○虚構による芸術的な創造の世界（人間運命の洞察と批評） ○下降認識による人間の分析と理解 ○煩惱の世界に迷いを語る凡夫の声 ○自由に解放された思考や精神の表現 	<ul style="list-style-type: none"> ○信心による宗教的な行の世界（人間存在の体解と身証） ○上昇志向による人間の分析と理解 ○涅槃の境地に悟りを説く覚者の言葉 ○戒・律に導かれた思考や行為の深化

つまり、これを要約すれば、文学は人間の汚濁した迷妄の追求を、仏教は人間の清浄な悟達への行願を、それぞれの立場と方法において志向

するものだと言えるのではないだろうか。

したがって文学作品の優劣は、文章の構造や表現の巧拙によっても左右されるが、より多く、根本的にはその内容のもつ人間的現実の振幅——つまり、生きた人間が描かれているかどうか——によるのである。

悟って行いすました人間をいかに巧緻に描写しても、文学的な感動は稀薄であるが、迷い悩める人間と、したがって矛盾や紆余曲節に満ちたその運命を描くことで、そこに普遍的な人間の姿と生きざまが浮き彫りされ、読む者に文学作品としての重さや深さを感じさせることができるのである。つまり文学作品の機能は、人間や人生の真実を、むしろ否定的に、逆説的に、間接的に語ることによって、かえって事実の底に潜む真実の姿を掘りだし、読者の共鳴や感動を引き出すことができるのである。

ここに水上勉の『雁の寺』（初篇『雁の寺』は三十六年一月発表、同年上半期の直木賞受賞。同年六月『雁の村』、十二月『雁の森』、三十七年二月『雁の死』を書き継いで三十九年四月、『雁の寺（全）』四部

作を完了。その後、改稿して「文春文庫」版を四十九年十月に発行して旧版を絶版とする）を採り上げるのは気が重い。この作品に登場する主役の僧侶が、いずれも世間の常識的価値判断からすれば悪人か異常人ばかりで、いわゆる宗教家としての道心や清廉を保持する僧侶ではなく、また美談や醇風美俗的な善人でもないからである。

しかし、この作品は、発表当時の推理小説ブームの機運にのり、作者自身の体験に根ざした自伝的要素を盛りこむことによって、活きた人間像の造型に成功し、従来になく純文学的に密度の濃い推理小説として、高く評価されたのである。また作者水上勉は、幼少年時における苛酷な子僧体験の怨念を、この作品に煉りこめたとされている。

心理学的に言えば、すべての人間は、その幼少年時体験によって潜在意識をはぐくみ、無意識的な劣等感補償の営みによって、その後の生活行動を律していくとされる。仏教学的に言えば、阿羅耶識や末那識等における能変性、と言えようか。

文学的には、この潜在意識による精神形成や感覚の志向性の場を八原風景Vとか八自己形成空間Vといい、すべての作家は、各自の抱くこの深層心理によって芸術的イメージをよび醒まされ、それを八心象風景Vとして、独自の個性的な作品を創造していくことになるのである。

『雁の寺』の主人公である、衣笠山麓の孤峯庵の小坊主、慈念は、作者水上勉の分身として、このことを説明するまことに典型的な具体例となっている。

まず、『雁の寺』初篇の時代的背景は、昭和八年の秋となっている。これは作者が、昭和四年に貧しい生家の口べらしのために京都の名刹、臨済宗相国寺の塔頭瑞春院の徒弟となり、昭和七年春にそこを脱走、同年秋に天竜寺派の別格地である衣笠山麓の等持院に入っているから、この経歴と照応する。すなわち物語りは、等持院に入って二年目の秋に時代設定がなされている。

慈念の出生や育ちについては、『苦狭の寺大工の子での、本山の普請で話を耳にしたのんでみたのじゃが、苦狭本郷の西安寺の和尚がつれてきよった。成績のええ子じゃいうのでたのんでみたのじゃが、頭はええ、大きな脳味噌をしとる……』と、孤峯庵の住職の慈海がその内妻の里子に話した言葉や、後日、その西安寺の住職木田黙堂が孤峯庵を訪れた時に、里子が自分から進んで慈念の生い立ちを訊いた答えのなかで語られる。『妙な子でしてなア。あの子はあんた、阿弥陀堂に捨ててありましてン』『阿弥陀堂というのは、底倉の部落の西のはしの乞食谷にあるお堂でしてね。……』そのお堂に毎年秋になると餅をもらいにくる、お菊という乞食女の生んだのが捨吉（慈念）だという。

水上勉が福井県大飯郡本郷村岡田九番地（俗称、乞食谷）に、宮大工の二男として生まれたことは事実である。そして阿弥陀堂の捨子うんぬんの記述はフィクションであろう。しかし、九歳にして生家の口べらしのために寺に出され、十七歳で等持院をも脱走するまで前後七年余の寺院生活が彼にとって、ただ不信と幻滅と苦悩と絶望だけのものではあったとするならば、彼をそのような生活へ仕向けた家郷への怨恨が、逆に負

のマザーコンプレックスとして、母恋いVの感情を強め、母親を置去りにして他国へ出歩く父親を親しみのない存在として、冷く客観視するのは当然であろう。自分の分身に「捨吉」と命名し、乞食女お菊に哀しく母性を求めざるを得ない作者の心情が、微妙に働いているのである。

次に慈念の風貌は、最初に慈海が画家の岸本南嶽の病床を見舞った時、この和尚の後ろについて来た「まだ十二、三歳としか思えない小坊主」として描かれている。「剃っているので頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子供で……額が前にとび出ている。ひどい奥眼なので顔がせまくみえる。」

前日に得度式がすんだばかりで、侍者として育てることになった披露目のために、慈海はこの小坊主を檀家総代である岸本南嶽のところに連れて来たのであった。が、大きな頭をつるつるに剃った慈念の横顔をみつめていた弟子の南窓は、「ずいぶん陰気な感じのする小僧を入れたものだな」と思う。

南嶽の死後、初七日にして早くも南嶽の妻から好色な慈海の内妻になつてしまった桐原里子も、初めて慈念の「ひっこんだ奥眼をきらりと光らせ」た顔を見た時、びっくりして、妙な子供だと思い、「変になじめないものを感じる」。そして年齢をきき、十三歳で大徳寺の中学校へ行っていることを知る。その後、「顔に似合わず小まめに働く子供だ」とは思うが、里子はなぜか慈念を好きになれない。それは、「だいいち、この少年は頭が大きく、軀が小さく、片輪のようにいびつに見えたからで……気性はそうでもなく、素朴なところがあって、いうことも素直に

きく子だったが、見た目の暗い陰気さ」が「たまたまなかった」のである。

慈念の孤峯庵における日課についても、作者が大人になってからの批判と、「禅寺の修行というものはつらいものだ」という里子の同情的ないたわりの眼を通して、描かれている。すなわち、慈念は庫裡の玄関横の三疊の板の間に、柳行李を一つ足もとに置き、黒い木綿地の蒲団を敷いて寝ている。その部屋には背の届かないほど高い格子の一方窓があるだけで、一日に三時間ほどしか陽がささない。朝五時に起床して夜十時に就寝するまでの日課は、洗顔、勤行、飯炊き、朝食、八時半登校、徒弟養成のための学校なので午前中で授業終了、午後一時下校、昼食、二時から日没まで作務で掃除や薪割りや草取りや汲み取りなど、六時に帰宅して食事の用意、八時に夜食終了、それから経文の筆記と続く。「実際、慈念は、孤峯庵では孤独であった」というのは作者の、真情を吐露した述懐であり、里子の「普通の家の子供ならば、まだ、親にあまえている年頃でもあるし、きめられたこのような日課を判で押したように守ってゆくのも辛勞なことだろう」という感想にも、過去の自分へのいたわりが込められている。だから「この生活が、あの子にはありがたいか！V」という里子の好奇心には当然、作者の批判の心情があり、引続いて「きっと、寺大工の家はまずしかったにちがいあるまい」と里子に想像させることによって、そのような修行生活に服従した過去の愚かな自分への、弁明的な説明をする——という風に、文章が書き進められている。つまり前述したように、この作品はぎわめて作者の生活に密着しており、創作として客観化する技術的な操作をしながらも、過去と

現在をないまぜた心情的な作者の主観が、色濃く滲み出ているのである。

ところで一方、慈念の師であり孤峯庵の住職である北見慈海は、どのような僧侶として描かれているのだろうか。前述したように彼は最初、画家岸本南嶽の死の床に慈念を連れて登場する。「首に白絹布の護襟をまき、黒の被布をきて、どこかの回向の帰りとみえ、裾から紫衣の襷をのぞかせている。『どうや、どんなあんばいや』という声は高く、天井まで響く。病室に「つかつかと入ってき」て、南嶽が『来てくれると思うとった』と言うと、『いやな役目やな』と、『ずんぐりした肩を落して』『横柄な物言い』をする。それから慈念を南嶽に紹介し、やがて枕もとから踵をかえして縁の方に歩きですが、その時、南嶽が『和尚さん、さとを頼みますよ。あれは孤峯さんの娘や』と言ひ、臉を閉じて、はげしく咳き込むのである。遺言であり、南嶽はもはや草色の顔をしている。慈海はその様子を、「大きく会釈しながら見下ろしてい」て、『大事にな』と言う。

この場面の描写は、慈海と南嶽との親密の度合いや、桐原里子を慈海がやがて自分の内妻にすることへの暗黙の了解を、雰囲気として読者に感じさせる。文章はこの後で、里子という女性のことと、南嶽が孤峯庵の書院をアトリエとして仕事をしていたこと、とくに庫裡から廊下をつたって本堂までのすべての襖に描かれている雁の絵が、南嶽の筆によるものであること等の説明をしているが、その中で、里子が「三十二だが、小柄で、ぽちゃっ」としており、胴のくびれた男好きのするタイプで

かなり美貌な女であり、慈海が南嶽よりも十歳も若年で「南嶽に負けなはいほど精悍な軀と顔をしてい」て、「性が合った」と書いている。この三人は、書院でよく一緒に酒を呑み、慈海は里子に、『和尚さん、耳の穴の毛エだけはぬいとくれやすな』『和尚さんの眼エがこわい』などと言われて、「好色な光りが宿っ」た眼をして笑っているのである。また慈海は、南嶽と「好みが一致してい」て「女も酒もすべて話が合」い、好色な「和尚が独身を守る理由がない」と南嶽に言われ、「へらへら笑って」いるのである。したがって南嶽の初七日がきて里子が孤峯庵の門をくぐった日に、慈海が「喜悅の声をあげ」て『あがんはれ、あがんはれ』と里子を迎え入れ、『さ、あっちへゆこ、いっぱい菓酒をさしあげよう』と「うきうきして」隠寮に通したのは当然であろう。そして「慈海の妻になれば、まず喰うに困るということはない」という里子の腹づもりもあって、自然の成行のように二人の関係ができるのである。慈海は里子によれば、「禪坊主らしからぬ俗氣の見える顔立ちをしてい」たし、稚氣のある笑い顔をするのも「好ましいところだった」。

かくして、かつて慈海が南嶽に言った『髪を断ずるは愛根を断ずるなり』という言葉とは裏腹の、ひどく淫乱な慈海と里子との愛欲生活が始まるのである。作者は小坊主慈念の孤独で苛酷な生活とは対蹠的に、淫蕩な慈海の日常を、怨念をこめて執拗に描写しているが、慈海はその現場を再三、慈念に目撃されており、その事が、やがて慈念に殺害される一つの誘因を作ることになっている。

そんな慈海の露骨な愛欲の場面は、ここに引用するのも憚られるほど

であるが、彼の僧侶像を浮かび上がらせる必要上、説明文だけ二カ所引いてみると、「慈海は、暇があると、里子のわきに足を入れた。慈海の性欲は、南嶽とは比べものにならなかった。それは、慈海が雲水時代から独身を通してきて、今日までためてきたものを噴出しているように里子には思われた。事家、慈海は、朝も昼も……」『南嶽は十年もお前を放したがらなんだ。今になって、ようわかるわ。お前は、さと。お前は、わしの仏や、愛根や』と「慈海はうわずった声をだして里子にいった。あらんかぎりの痴態を……」といった具合である。

ところで、ここで僧侶ではないが、慈海の内妻の桐原里子について、少しく眺めてみなければならない気がする。それは里子が、慈海の「愛根」であるばかりでなく、実は主人公慈念の父母恋いの対象でもあり、ひいては師匠である慈海を殺害するに至る、一つの原因や動機としての存在でもあるからである。

里子は、はじめ木屋町の小料理屋につとめていたのを、南嶽がひっこぬいて、上京区の出町の花屋の二階に開いていた女だった。生家は八条坊城にある営業卸業者で、今も父は松脂まつしと黒粉をまぜて竹の皮に包んだ「むぎわら膏藥」を、籠に入れ、自転車に乗って卸し歩いている。幼くして母を喪い、継母が来るまでは淋しがって泣いてばかりいた。父が卸売りに出た留守には戸に鍵をかけられ、軒のひくい長屋の暗い奥で待っていた。そして「十三のとき、五条坂の料理屋へ奉公に出され」ている。

里子は、このような自分の過去を、ある時、慈念に話すのである。

『……それからいろいろ苦勞して、今日、この和尚さんのお世話になつとるけど、小さいときは、みんなあんたと同じように、つらい思いをしたわな』最初、「慈念はおびえたような眼で里子をみていた」のだが、里子が『お父はんも、お母はんも達者？』とか『あんた、お母はんのこと思うやろな？』とか言いながら、かき餅をすすめ、自分の不幸な身の上話を始めるにつれて、「慈念はくぼんだ眼をしょぼつかせ、じいっと聞いている」のである。

それは、秋から始まったこの小説が、冬を越して三月を迎えたある日のことで、「慈海が檀家に出かけて留守」で、慈念は「作務にきびしい慈海から「春のうちにこの草の根絶」を課されて、無心に草取りをしていた時であった。「慈念の小さい指の力ではとれないから、竹でつくった小刀」を「地面にさし入れて、拇指で草をおさえ、根切りしながら、一本ずつ抜いてい」た。

身の上話が終って里子は言う。『苦勞はするほどええもんや。な、しんぼうおし、あんたも、えらい和尚さんになってな』。

その前には、こういうことも言っている。『慈念はんは、坊さんにならはるのやろ。ええなあ。将来はもうきまってしもとる。和尚さんについて修行積んで、これから僧堂へいくんやろ。学校出たら、僧堂へ雲水に出て、お寺の和尚さんになるんやな。……ええなあ。うちら、女ごやさかいあかへん。なんぼきばったかて、人の世話になるしか道があらへんしな？』この時も、「慈念はじいっと里子の顔をみつめていた」。

つまりここでは貧しく恵まれない境遇に育った里子の、似た立場にあ

る慈念への△母性愛▽的な同情が描かれており、その背後には、作者水上勉の自分の過去にたいする^{いたち}労りの眼が注がれ、満たされなかった△母性愛▽への憧れが述べられているのである。

しかし、慈念の胸中に存在する里子は、ただそうした単純な意味をもつばかりではなく、もっと微妙なかかわりをもっているように思われる。それは、『あんたも、えらい和尚さんになってな』と言って立上ろうとした里子が、庭下駄が石にはさまれて倒れそうになり、膝がしらがひらいて風をうけた内股に慈念の眼の「鳶のような光りが走ったのを」みとめた時、「△この子は！▽……△やっぱり、あのとき、見たのや！▽」と直感したことである。「あのとき」というのは、隠寮で初めて慈海との関係が生じた時である。そして、その後、里子がこの寺に来てからは「朝の勤行は慈念が一人でつとめるようにな」り、「朝早い五時すぎの慈念の読経の声や、磐子のひびき」をききながら、「慈海は里子を抱いたまま寝ているのである。もちろん、「日課は修行であり、侍者である者の務めかもしれぬが、住職である和尚が、女を愛撫している時間に、侍者が勤行しているのは里子にも気になっ」ている。「しかし里子は慈海というなりであ」り、「反抗したことは一どもな」い。それを、慈念は知っている筈である。

そればかりではない。「勤行、作務、学校と不死身の軀でないとつとまるはずがない」日課を、「四尺そこそこの小さい軀」で務めている慈念は疲れきっており、ある朝、寝すごしてしまつて読経が遅れたということで、白い麻縄を慈念の手にくくりつけ、その端を庫裡で慈海がひっ

ばる仕掛けをしたのである。慈海は「この麻縄の端をひっぱる楽しみに頬をふくらませていた」が、里子は「ずいぶん、殺生なとしやはる」と思う。それが「盆がくるまえの暑い夜なか」「障子はあけ放して」房事の最中に、『和尚さん、よばりましたか』と慈念が廊下に立っていたのである。『よばりましたかとちがいますか。麻縄がひっぱられましたんだす』。慈海が『寝呆けちゃあかん、呼んでへん、呼んでへん』『ええ、ええ、もどつて寝え』とは言ったが、実は「宙を蹴った里子の足が、縄の端をもつらせてひきずっていたのである。」

「△見たにちがいない。あの子にまた見られたわ▽」と、「里子は鉢頭のひっこんだ慈念の眼を思いだ」すのだった。

引例が長くなるが、まだある。「慈念の通学している紫野大徳寺にある中学から、蓮沼良典という教師が孤峯庵をたずねてき」て、無断欠席が多いので、『……これからは届を出していただきたいと思うんです』という。『高い月謝を払うとるに勿体ない』と慈海が大声で叱って、里子に慈念を呼びにやる。慈念は、探すと築山の陰で「無心に草を取って」る。里子が、『あんた、だまつて学校休んどるそうやないの。先生が叱りに来やはったえ』と、「この言葉をなるべくやわらかく」言うのと、慈念は「訴えるようにいって里子を仰いだ」のである。『教練がいやや、鉄砲持つとくたびれるんや』慈念の「ひっこんだ眼がぬれて」「両眼が充血してい」た。

里子が慈念をつれて隠寮にもどり、慈海と蓮沼とで無断欠席のわけを質したり、教練は文部省令で受けなければならないことを説得したりす

るが、里子はじいっとだまってきいていて、「慈念の厭^{いや}がるのもわかる気が」する。「この軀で、鉄砲が皆といっしょにもてるものではない。」「慈念は小学校三年くらいの背丈しかないの」である。……ところで、連沼教師を玄関に送った足で本堂の裏に廻った里子は、物置の蔭で何げなしに裏庭をみて立停ったのである。

「慈念が池の面をじっとみつめて立っていた」「慈念は池の中の島につつ立って水面をみて動かな」い。気になった里子が、「池の鯉^{こい}かと思つた」途端に、「慈念は掌を頭の上にふりあげたと思うと、水面に向つてハッシと何か投げつけた」のである。慈念は「一点を凝視している。」里子も「池の面を遠眼にみつめた」が、「瞬間、里子はアッと声を立てそうになる。灰色の尺余もある大きなシマ鯉が背中に竹小刀をつきされ、赤い血を出しながら、水を切つて泳いでいたのだ。

「△こわい子や。何するかわからん子や▽」

里子は、慈念を叱りつけようとしてやめ、そつと隠寮にもどり、慈海にも話さずに自分の胸にしまいこむが、内心では「憤懣^{ふんげん}を、他の生物に投げるしかない」慈念の孤独を「哀れだと思」い、「不憫^{ふびん}でならなくなり」、「慈念に感じる恐怖感をとりのぞくためには、慈念の全部を知ること以外に方法はない」と思つて慈念の過去に興味を集中させるのである。この場面は、小説の筋立てからいえば、慈念が慈海を殺害する事件の伏線になっており、また里子自身も、結果的には慈念の決行を一步進める役割に、荷担するきっかけを作ることになっている。

ここまで読めば、『雁の寺』という作品の筋書は、あらかた説めたといつてよからう。作品の分量からすれば、まだ半分にしかな達していないが、慈念の、師匠慈海殺害の原因はほぼ出尽している。残り半分は慈念によるきわめて冷静な、そして巧妙な殺害とその死体処理の方法の描写である。したがって、いわゆる推理小説的色彩が濃くなるが、ここでは最早、慈念の僧侶像を考察することはないだろう。故に、その作業は省略したい。

ただ、一つ残されているのが、殺害の直接的な動機と考えられるものである。そして、それが前述のように、里子の、慈念の過去に対する興味の集中と、西安寺の木田黙堂によつて知らされた慈念の「数奇な運命」がもたらした、異常な衝撃と昂奮である。

「里子は蒼ざめた顔をじっと黙堂の話に耳をかたむけていた。」慈海を生んだ乞食女お菊のことである。『それから、どないしやはりましたン』と話の先を催足したり、『へーえ』と思わず声をだしたりしながら、ふびんな捨子である慈海の身の上話^{うわさ}をきき、「里子は大粒の涙をおとし」ていたが、「慈念の生い立ちについての事どもが、脳裏からはなれな」くて、夜になつても眠れない。今まで「慈念について考えていたことが、音をたてて変るような気がし」、「誰にも好かれないようなあの風貌が、いま、里子に、哀れをともない、殊更^{ことさら}にいいとおしかった」のである。そのために里子は、慈海の床から起きあがつて慈念の部屋に行き、まだ起きて写経をしていた傍に坐りこむ。『慈念さん、あんた、かわいそうや、うち、みんなはなしきいたえ』と、「里子はやさしくあえ

ぐようにいつて、「胸もとにつきあげてくるような愛し」さを「こらえきれないままに里子は不意に慈念を羽搔いじめに抱きしめ」る。「膝の中へ慈念をはさ」むと、「激情が里子をおそ」い、「乳房のあいだへ慈念の顔を押しつけ」て、『なんでもあげる。うちのものなんでもあげる』と言う――

時間的には、七月の棚経が終り、盆もすぎ、南嶽の一周忌もすぎる。読経のあとで南嶽の本妻の秀子が、『慈念はん、和尚さんには、奥さんがいやはりますのン』ときいたが、「慈念はだまってさいづち頭を振っただけで」、「この子供にたしなめられたような気が」する。そして「十一月の七日のこと」――

檀家の久間平吉の家で亡父の三周忌の読経をたのみに来、慈海は酒仲間の源光寺に行くからといって、慈念に読経に行くことを命ずる。慈念は平吉の家で読経が終ってから、中の間に臥ている病人で平吉の兄の平三郎の姿を見ている。「喀血を二どして、もう医者が見放しているという噂」の病人である。『こうして、意識不明で三日目どす』と平吉はい、帰ろうとして敷居をまたいで市電通りへ出る慈念を、「思い切ったように呼び止めて」言う。『もうじき、兄がいきますのや。兄がいんだら、また葬式だしてもらわんならん。……』だが、慈念は無表情であった。その帰り道で、慈念は金物店に立寄り、肥後守のナイフを買っている。また久間平吉との会話の中で、『和尚さんは、修行に出たいいうてはります』と言い、「おかしいことをいうな」と平吉の耳をうたがわせ

るような発言をしている。慈海殺害のための工作であるが、もちろん、作品は推理小説らしく、さりげなくそうした発言や事実を文章の中に潜めている。だが、次の場面ははっきりと、不吉な事件を暗示するために書かれているだろう。

すなわち、慈念を久間平吉の家の読経に出すと直ぐ、慈海は里子と房事を行い、「自分で簞笥をあけ」「他所ゆきの白衣にきかえ」て源光寺に出かけて行く。

里子は、そのあとで「裏廊下から冬にちかい衣笠山をみ」る。「疎林の中の一本の椎の木」があり、「いま、そこに鳶がとまっていた。」そのとき玄関の方から慈念が歩いてきたので、里子が声をかける。『慈念はん、早かったなァ』『いま、うちは、あのとんびん見てたんや』すると、慈念が「珍しくこんなことをいった」のである。『奥さん、とんびん、なにしているか知ってはりますか』『とんびんはな、あそこに貯めてんのや』

里子が「妙なことをいうと思っ」て訊くと、『のぼってみたら、天辺に壺みたいな穴があってな。下はまっ暗やった。じいーっと見てたら、底の方に何やらうごいとる。蛇やら魚やら鼠やらが仰山うごいとる。蛇は赤いのもいたし、白いのもいた。みんな鳶が地面で半死にしてからくわえて運んだんや』と言う。里子は「ぎょっとな」り、「耳を塞ぎたいような気がし」、「やめてんか、こわ、こわ、やめてんか」と眼をつぶって大声をあげるが、その夜夕食後も、「慈念からきいた鳶の巢のはなしは脳裏を去らない。」食べたものを吐き出したりして「いっそう気味の

わるさがつの」り、「へいやなことやはる慈念はんや！」と思いが
ら、「いつまでも鳶の姿ははなれな」いのである。そして、常態を逸し
ていた慈念との夜のことを想い、「あの夜の気の狂ったような自分の行
為がふかく後悔され」、「あれはいけないことだった。もう二どとあんな
ことはすまい」と、「心に誓ってみるのだ」った。

北見慈海が孤峯庵を去り、再び帰らなかったのはこの日からである。

この日、十一月七日の夜の、慈海殺害と死体処理の模様の詳細につい
ては、前述のように省略したい。要約すれば、一時すぎ、「ひどく酔っ
て」帰った慈海は、耳門みみどを入ったところで飛びかかってきた慈念の竹小
刀で心臓をえぐられ、肥後守のナイフで、とどめをさされた。その死体
は内陣の倉庫の暗がりくらがりに隠され、翌日の夜、予想通りに死んだ久間平三
郎の通夜読経のうちに、大磐おおいす子にのせて運ばれ、平三郎の棺と一緒に入
れられた。そして明るる九日の朝、平三郎の葬式が行われて棺は衣笠山
麓の墓地に、事もなく埋められたのである。慈念はこの作業を、きわめ
て冷静に、巧妙に手ぎはよく処理している。また寺に帰って火を焚たき、
すべての証拠になるようなものを焼いている。

ところで、慈念の殺人の原因と動機については、以上を眺めたことで
概ねの見当はつくのであるが、作者は作品の終りの部分でこの事を整理
している。慈念が火を燃やしながら自分の今までの追懐するように書か
れているが、もちろん、これは作者水上勉の考えでもあろうし、ひいて
はこの作品が書かれなければならなかった内的必然性でもあるだろう。

すなわち原因となった心情については、幼時からの孤独感を述べ、
「孤独な心のもってゆき場所のない慈念は、どんな夢をみてきたらう
か」と言っている。彼が「頭にえがいた夢は一つきり」で、「それは苦
しいながらも、なじんできた寺の生活を利用して、時間さえうまくやれ
ば葬式の棺桶に死体を詰めて殺人ができるという思いつきであった」と。

そして動機については、すでに前に考察したごとく、「里子に犯された
夜、慈念はいい知れぬ里子への憎悪と愛着の混濁した衝撃に打ちのめさ
れたのである。甘美な陶酔のあとに慈念を襲ったのは慈海へのはげしい
憎悪のほかには何もなかった。手のしびれるほど、麻縄でひっぱり起し
た和尚を憎んだのだ。和尚のしていたことは、鳶とびの巣の穴の中に、うご
めいていた蛇のようではないか。覗のぞきみた和尚と里子の連夜の狂態。／
その慈海をこの世からついに葬ってしまったのだ。」というわけである。

最後に（久間家の葬式がすんで十日たった日の朝）、慈念は眼を異様
に光らせて、本堂にある南嶽の雁の襖絵の前に立つ。そして、「力いっ
ぱい母親雁の襖絵に指を突込んで破り取」る、そして翌日、慈念は孤峯
庵から姿を消すのである。十年前、この絵を、南嶽に耳をくすぐられな
がらみた里子は、「蒼ざめ」て「慈念に哀れをおぼえた」が、「慈念が
母親雁を破いたことと、慈海の失踪したことが連関しているのではない
かという奇妙な疑惑を抱い」て、「背筋に恐ろしい戦慄が走」る。あの
七日の、慈海が帰らなかった風の夜をふり返ると、慈念の行動に不審が
湧き、「ひょっとしたら、慈念が恐ろしいことをしたのではないか、と
思」い「慄おそえた。」——しかし、「首を振ってこのおそろしい疑惑を打ち

消」す。

桐原里子は一ヵ月後に実家に帰り、それから二ヵ月目に新住職が晋山し、雁の襖絵だけはそのままに、前住北見慈海と侍者堀之内慈念の行先は知れずに、三人の風評も「やがて絶え」る。『雁の寺』という作品の第一部は、このようにして終るのである。

十五

『雁の寺』の第二部以下に堀之内慈念の僧侶像を探ることに、多少のためらいを感じる。それは、この僧侶の思考と行動のパターンが、原型として、すべて第一部に展開され、描き出されているようにも思われるからである。そのモチーフは、前述のように△母恋い▽と△怨念▽であり、そこから生まれる思考と行動のパターンは、△原風景への回帰▽と△原風景からの脱出▽の繰返しである。そのために慈念は、若狭と京都の間を、いく度も峠ねづらを変えて移り住む。それは、いみじくも渡り鳥である雁の習性に象徴されている。表面的には新しい師僧を求めて彷徨する雲水の姿であるが、内面的には、自分を生んだもの——生母や父——と、育てたものへの回帰とそこからの離脱、その葛藤の反復、である。そのためにこの作品は、生活環境の描写が克明であり優れている。ある部落とか、ある寺院の、風景やその中での人々の生活の様子が、すこぶ具体的に、写實的に描かれている。とくに禅寺内の生活や風俗がこのようにリアルに、ビビッドに描かれた作品は、他に例がないであろう。

——が、反面、次のような点で、疑問と不満が無くもない。

それは、『雁の寺』——『雁の村』——『雁の森』——『雁の死』と読み進んでも、仏教的小説ではありながらも、そこには信仰への問題意識が稀薄であるということである。禅寺の生活の中心が行事であることは言うまでもないが、それを裏付けるものは信仰である筈なのに、それを語る言葉が殆どない、というのはどうしたことだろう。読経をするにしても、それが愚劣なことだと雲水の修行生活そのものを批判する意図で書かれた作品であるならば、それを信仰の問題として告発する言葉が、どこかに現れてもいいではないか。それが無いのである。むしろ作品は、時として作者は過去の苛酷な禅寺での生活を懐しみ、楽し気に追憶しているのではないのか、とさえ想わせるのである。先に、第二部以下の作業に多少のためらいを感じるといったのには、この点も含まれている。

しかし、勿論、第二部から第四部までの作品には、時間の経過があり、いくつかの事件の発生もあるから、以下順次に、慈念のおおよその行動だけを、限られた紙数内で辿ってみることにしたい。

第二部の『雁の村』は、昭和十一年八月のはじめから、十二年十月の末までの慈念を描いているが、その場所は京都ではなくて、彼の出生地である若狭本郷の底倉部落である。つまり、△原風景への回帰▽である。すなわち慈念は、「網代あじろがき箆を手にもち、ふり分けにした小荷物を左肩にかつぎ、時々その荷へ手をそえてやや前かがみに急いで」、育ての親である寺大工の堀之内角蔵とおかん夫婦の住む家へ、やって来たのである。

る。彼が孤峯庵を出てから二年経っており、その「頭鉢のひろい額も、軍艦頭もひっこんだ眼も」「ひとまわり大きくなっている」。

三方を山に囲まれた戸数六十戸の底倉部落、その乞食谷にある「ひしやげた荒家の前に立つ」た慈念は、「しばらく、息をこらして」いたが「やがて戸をゆっくりあけ」る。忽然として現われた捨吉（慈念）の姿に、養母のおかんは言葉もなく「信じられないような顔で、眼をすえ」、義弟の松治と定治は出てこずに破れ障子の穴からうかがい、父の角蔵は越前に普請に行つて不在である。おかんは慈念を家に上げず、すぐ寺へ——木田黙堂の西安寺へ——行くことをすすめ、慈念も「はつきりとみえる義弟の、異様に敵視する眼」に脅えて寺に行く。『家へゆくのがいやになりました。わい、あこはもどりとやない』という慈念を、黙堂は『そらそうやろ。お前はもうあの家の子やない。出家しとるんやさかい、……もうお前には寺しか、帰るところはないのや』といって迎え入れる。

雁の村に戻った慈念は、読経が上手で「ひっぱりだこ」になる。「本山仕込みの回向の節と、節度の正しい行事作法を身につけ」ていたので、「田舎寺の和尚たちには真面目にみえたし、重宝がられた」のである。西安寺でも住職の黙堂が「役場の書記をつとめて月給をもらっている上に、小僧の慈念が役僧で稼いでくる」ので、梵妻のたつ枝も「ほくほくで」あった。

しかし、たつ枝が慈念のこの二年間のことを「何げなくきいてみ」ても、黙っているし、「しつこく訊くと」慎重な返事で理解できず、途方にくれるのである。慈念は夜になると、本堂裏の自分に与えられた部屋

にもどり、慈海を殺害した時のことを「生々しく思いかえ」して「胸もとをつきあげるような激しい恐怖」におそわれる。そして「八誰も知らない。誰も気づいていない……」と思うことで、「安心しよう」とする。木樵の家の辰之助という友だちが来て、底倉村の習慣の「夜這い」を見にゆこうと誘うが、慈念は断わり、「八阿弥陀堂にきたお菊にい込んだ男は誰だろう。そいつがわしの親爺かもしれん……」と考える。

その年がすぎて翌年の七月、見知らぬ僧侶が村へきて、西安寺に掛鋤する。三十七、八歳の背の高いやせた僧で、美濃正眼僧堂の副司をしていた宇田竺道であるが、応待に出た慈念は、話が孤峯庵に及んだとき「竺道の澄んだ眼が、好奇心に変」るのを見て、「八あ、ことを調べにきたのではないか……」と思う。そして、その後も、竺道が慈念の通っていた般若林のことや、蓮沼という担任のことをきいたりするので、「慈念はうっかり喋ったらボロが出るぞと警戒」して「話題をかえる」。『和尚さん、悟りをひらくということはどういうことですか』

『なんというてええかな。自分を知ることやな、つまり』と竺道は言う。すると慈念は、肩を大きくふるわして言うのである。『和尚さん、わしらは一生自分がわからんわな。和尚さんは自分を産んでくれはった人を知ってはいりますか』竺道が微笑して、父も母も大切だと答えると、『ほんなら、なぜ出家しますか。大切なお母はんやお父はんを捨てて……』と訊く。『迷いのきずなを捨て去るためや』と答える竺道に、『すると、お母はんを思うことは迷いどすか、そら矛盾しとるわな』と慈念

はつづけるのである。『わしらはお母^かもお父^とも知りまへん。この世に生きているものやら死んでいるものやら知りまへん。捨てんならんお父^ともお母^かもあらしまへん。どこにいののかわからん。けども、わしは、そのお母^かはんに会いたい思います。お父^とはんが誰であるか知りたい思います。これ迷いどすやろか。わしはやっぱりええ坊^あさんになれまへん。和尚^{おつ}さんらは坐^ざ禅^{ぜん}して眼^めつぶらはると、お母^かはんに育てられた温^あったかい日^ひが思^{おも}いだされますやろ。わしらは眼^めつぶったかてむささびの啼^なく声^{こゑ}しかきこえしまへん。和尚^{おつ}さんらにこんな心^{こゝろ}わかりまへんやろ』引用^{引用}が長^{なが}くなつたが、この慈念^{じねん}の言葉^{ことば}は大切^{たいせつ}である。彼は投げ捨^なてるようにそ言う^いと、部屋^{へや}にかけ上^あつて障子^{しょうし}を閉^ふめ「八里子^{はちりし}はん……」と心^{こゝろ}の中で叫^{こゑ}ぶ。眼^めをつぶった慈念^{じねん}の臉^{おもて}には、「おかん^{おかん}の顔^{かほ}と、里子^{りし}の顔^{かほ}」いつまでも浮^うかんでは消^きえるのである。つまり、慈念^{じねん}の八母恋^{はつぼれん}いVの感情^{かんじ}による寺院生活^{いんねんせいかつ}への批判^{ひはん}が、ここで初めて、あからさまに語^{かた}られているのである。

なお、慈念^{じねん}はこの日^ひ、宇田竺道^{うだんしどう}の「澄^{すみ}んだ眼^めにいいあらわし難^{がた}い慈悲^{じひ}の光^{ひかり}」を見、「この人は自分に愛情^{あいじやう}をもってくれている」と感じる。この竺道^{しんどう}は『雁^{かり}の村^{むら}』の終^{はつ}りに「第二十三世万年山燈全寺派専門僧堂師^{にじさんじせいはんざんぜんしはいせんもんそうどうし}家に招^{まね}聘^{へい}された」と記^きされ、第三部^{だいさんぶ}の『雁^{かり}の森^{もり}』の終^{はつ}りにも「万年山燈全寺派管長^{わんざんざん}」として登場^{ていじやう}して慈念^{じねん}と再会^{さいかい}するが、この人は現在^{げんざい}の天龍寺^{てんりゅうじ}派管長^{はいくわんざん}、関牧翁師^{かんぼくおうし}がモデルとされている。水上勉^{みづかみ}の小説^{せうせき}に登場^{ていじやう}する僧侶^{そうりょ}の中で、まともな禅僧^{ぜんそう}として描^{えが}かれているのはこの人^{ひと}だけである。

さて、八月十四日^{はつげふじゅうにち}が本盆^{ほんぼん}の日^ひで、慈念^{じねん}は底倉^{そこくら}の村^{むら}と乞食谷^{きじきや}を棚経^{たなけい}に廻^{まわ}った。「村じゅうのどの家^{いへ}よりもみすばらしい養家^{やうか}の「おかん^{おかん}の家^{いへ}」にも行き、仏壇^{ぶつだん}を拭^{ぬぐ}いて観音経^{くわんおんけい}を誦^{よみ}む。また夕方^{ゆふがた}は、おかん^{おかん}の家^{いへ}の墓^{はか}へ行き、時間^{じかん}をかけて墓^{はか}経^{けい}をよんだ。そして二十一日^{にじゅういちにち}の夜^よは「阿弥陀^{あみだ}の舞^{まい}」で、慈念^{じねん}は乞食谷^{きじきや}のさんまい（埋葬地^{まいざうち}）にゆく途中^{ちゅうちゆう}に建^たつ阿弥陀堂^{あみだどう}の広場^{ひろば}で、一年^{いちねん}に一度^{いちど}しかないこの行事^{ぎぎし}を眺^{なが}めた。高張提灯^{たかちやうていとう}を掲^かげもち、松明^{しょうめい}を背負^{せお}い、太鼓^{たいこ}と鉦^{しん}を鳴^ならして走^{はし}るこの「虫送り^{むしやうり}」行事^{ぎぎし}の中で、慈念^{じねん}はかつて『捨^{すて}よ。われが生^うれた阿弥陀堂^{あみだどう}やど。われが生^うれた阿弥陀^{あみだ}の舞^{まい}やど』と囁^{ささや}かれた言葉^{ことば}を思^{おも}い出す。「意地^{いぢ}の悪い子供^{こども}らが何^{なん}げなく漏^もらしたこの言葉^{ことば}」が、「はっきり事実^{じじつ}はわからないままに、生涯^{しやうが}忘^{わす}れることのできない劣等意識^{りやくとういしぎ}」を慈念^{じねん}に与^{あた}えているのだった。堂^{どう}から寺^じへもどる暗^くがりでは、男^{おとこ}に襲^{おそ}われる女^{おんな}の姿^{すがた}を目撃^{めくき}し、いつか木樵^{きせう}の辰之助^{たけのすけ}から聞^きいた夜這^{よだ}い^いのことを思^{おも}い出すが、それはこの「阿弥陀^{あみだ}の舞^{まい}」の夜^よの習慣^{しやうぐん}なのだった。

阿弥陀堂^{あみだどう}から西安寺^{しあんじ}にもどった慈念^{じねん}は、胸^{むね}が音をたてて波打^なち、寢床^{ねど}に入^いっても、なかなか寝^ねつかれない。「八^はごぜとはいったい何^{なん}だろう……」先^{まづ}はど子供^{こども}らが叫^{こゑ}んでいた言葉^{ことば}「あーみーだーのまゑに何^{なん}やら光^{ひかり}る／ごぜ（替女^{かひめ}）の目^めがひかる／目^めが光^{ひかり}る」の、ごぜである。慈念^{じねん}は竺道^{しんどう}のいる書院^{しよゐん}の窓^{まど}の下^{した}へ行^いつて、『和尚^{おつ}さんは、ごぜ^{ごぜ}て何^{なん}やかしてはりますか』と訊^きく。『盲目^{めくらみ}の歌^{うた}うたいや』と竺道^{しんどう}は答^{こた}える。『三味線^{さんまいせん}ひいて、歌^{うた}をうとうて、物^{もの}もらいにくる女^{おんな}ごのことや……』慈念^{じねん}は庭先^{ていせん}をゆっくり歩いて部屋^{へや}に帰^{かえ}り、横^{よこ}になつて、先^{まづ}はどの桑畑^{そうはたけ}の中^{なか}の男女^{なんにや}のこ

を思い出している。

寺大工の堀之内角藏が、おかんの容態が良くないときいて戻ってきたのは十月の初めで、毎年それがしきたりの、阿弥陀堂の板張りをする時期になっていた。堂は祝儀の餅をもらいに来る幹女たちの、寝起きの場なのである。おかんから慈念が寺に戻っていることをきいた角藏は、寺に行つて七年ぶりに見る慈念に声をかける。庭の草取りをしていた慈念は、しかし黙つて白眼をむいて角藏を見ただけで、何もいわず、眼を伏せてまた草をむしりはじめるのである。棚経で角藏の家に行つた時、慈念は病みあがりのおかんに、『寝とらんとあかんで』と言っている。

『……晚げは墓まいりしたげる。おかん、棚経すんだら、墓まいりもさ、んまいもまいったげる。安心して寝とつて』とも。角藏は、そんな「おかんを放つたらかして仕事に出ていたことをなじられている」のだと思う。

やがて、角藏の阿弥陀堂の板張りが終り、村人たちが稲つみをしている最中に、餅もらいのお菊がやって来るのである。その姿を最初に見たのが木樵の辰之助で、『今晚から男たちが堂へゆくぞ』と思つて夕食後に、それを慈念に告げに行く。宇田竺道が坐禅を組んでいる書院に気をつかい、辰之助は窓の外から小声で言う。『わしや。辰や。お母^かアがきとる。捨、お前のお母^アや。阿弥陀へいけや。はよ行かんと、あかんで。村の若い衆が眼エつけとるで。ええか』

『雁の村』という小説は、かくして大詰に來たのである。慈念は、その夜、十一時すぎに西安寺の部屋を出る。「黒染の衣をきて、脚絆をは」き、「文庫も、風呂敷包もきれいな振りわけの荷にまとめ」、一年

前に飄然と姿をあらわした時と同じ姿になっていた。

阿弥陀堂に辿りついた慈念は、『だあれ』という女の声に膝がしらがふるえ、声が出ない。『だあれ、おはいりィな』「お菊の鼻にかかった声が慈念の耳をたたく」。息をつめて板戸に手をかけると、「蠟燭の火が大きくゆらめいて、そこに紅い腰巻をしどけなくまきつけたお菊が立っていた。」お菊は帯をといてだらしく前をはだけ、赤い襦袢^{じゆばん}から白い胸を出して慈念をひきよせ、うしろへのけぞるように顔を仰向かせて横になる。慈念は咽喉がつまり、立ったままで足もとのお菊の顔——自分の母だという女の顔を見た。「これが母だろうか。母であるものか」——慈念は眼の前の、「蒸れるように匂う軀を仰向けて、男を誘う顔」の異様さに息を呑み、堂の外に走り出るのである。そして、——堀之内慈念は、この夜から姿を消し、雁の村（底倉の部落）から「どこへ去ったか、知るものはなかった」のである。

第三部の『雁の森』と第四部の『雁の死』については、前に述べた理由と紙数の都合上、作品の梗概に触れることを省略したい。

ただ小説の舞台と時期だけについて見れば、『雁の森』は昭和十二年の秋、若狭本郷から姿を消した慈念が若狭半島の音海部落にある天徳寺派の海音寺に寄寓し、やがてその住職の世話で入った京都宇多野の奇崇院での生活が描かれている。奇崇院は足利三代將軍義満の創建した寺で、小僧が十四人もいる。そして作品も、主に住職の堂森越雲とその家族を中心に作られていて、慈念はむしろ脇役として登場するだけであ

る。

また『雁の死』は昭和十三年の秋のことで、万年山奇崇院から姿を消した慈念が、滋賀村高島郡雁村字明王にある燈全寺派別格地の観智院にあらわれ、そこに入堂して修業し、十一月二十五日の夜、改築中の三重の塔から落下して姿を消すまでのことが描かれている。

僧侶像という観点にしぼって、この第三部と第四部を読むと、要するにこの作品は慈念という雲水の、△母恋い▽の原点追究のあがきと、その結論であるように考えられる。すなわち、『雁の森』の中心人物である堂森越雲とその妻である福谷喜代子とは、その結びつきにおいても別離においても、きわめて『雁の寺』の北見慈海と桐原里子とのそれに酷似しており、これは『雁の寺』という作品全体の基調の、リフレイン的な効果を上げていると言えるだろう。この事から作者の言おうとしていることは、住職の死によって去らねばならない△禅寺の妻▽の浮き草のような運命であり、同様にして雁のように渡り歩かなければならない、雲水の運命である。

ところで慈念は、『雁の森』の終り近くで彼の素性を知る若狭三方の竜宝庵住職、矢野宗文に声をかけられる。『そんなら、お前はやつぱり角さんの子^オや。大工の角さんの子やろ』慈念が息をつめていると、『角さんは、お前がほんまの子やいうとったぞ。お母^かん知^かつとるか』と言^いって、お菊のことを話すのである。大きく唇をふるわせて黙っていた慈念は、『和尚^{おつ}さん、わしには底倉におかんがおります。わいを育ててくれたお母^かんがおります』と言^いって泣く。その後で、慈念は底倉の阿弥

陀堂の板戸を打っていた角蔵の姿を思いうかべるのである。「寺大工の角蔵が、もし、自分の父だったとしたら、やはり、母はおかんなのだろう。お菊のような女が母親であるはずがない。……」

「△比良へゆこう。父の普請場へいつてきいてみよう。父にきけば、お菊のことがはっきりとわかるだろう……▽」

それから一週間後に、慈念は奇崇院から姿を消すのである。

『雁の死』は前記のごとく滋賀の観智院が舞台で、そこに入堂した慈念と、三重塔の改築工事に従事する角蔵との対決が行われることになる。しかし、その頃、角蔵は底倉におかんを残したまま出稼ぎ先の借家で、お菊と同棲していたのである。彼は度重なる同僚の忠告にもかかわらず、「△お菊とは別れられん。お菊はきれいな心の女子^{おな}や。仏のような女子^{おな}や……おかんもかわいそうやけど、おかんはもう六十や。舞鶴の助治と咲治の仕送りでラクに暮らしとる。もう行末は安心や。それにくらべたら、お菊はこれから闇や。わしが放したらまた乞食して歩かんらん。……お菊を捨てるわけにいかん……▽」と考えているのだった。

慈念と角蔵との対決は、夕方の、月光の強まりかけた三重塔の屋根の上で行われる。

『お父^とや。おっ母^かはお菊やろ、な、いわんと承知せんぞ。ほんまのこといえや。阿弥陀堂のお菊はわいのおっ母やろ』と、慈念は必死な顔をし、泣き声で、怒鳴るように訊いた。が、角蔵は、ちがうと答える。『ちがう……お菊やないぞ』『お前のお母は底倉のおかんや。おかんにちがいないがな』

『嘘や』と慈念はどなる。『お父、そんなら、お父はなぜ、お菊といっしょにおる。わしのおっ母やからおるんやろ。……せやろ、お父』

その次に慈念は、この作品の生まれた内的必然性ともいうべき、キーポイントとなる意味の言葉を吐くのである。

『ほら、黙っとるな。都合のわるいときはだまっとる。お父のわるいくせや。お父、今日という今日は本当のことをいわせろ。お父、わしは、お父が阿弥陀堂でお菊にうました子やろ。そのわしの顔を見るのがイヤなんで、わしを寺へ子供に出したんやろ。お父、わしは今日まで禅宗のお寺で修業をつまされてきたけれど、何にもならなんだ。産んでくれたお母もお父もわからんようなこっでは、修行はできなんだ』

哀願するようにいう慈念の頬を、いく筋もの涙がつたい、月光の中で光る。角蔵は、もしも「いま、ここで真実をいった場合、慈念がどのよるな態度に出るかと思ってぞっとし」、慈念が「いま自分に殺意をもっているではないか」という「恐ろしい考え」がひらめく。「跳びかかれて、つきとばされたら、奈落の池へ落ちこんでしまう」のである。角蔵は「恐ろしい断末魔を見るような恐怖と不安におののく」が、やがて、やさしく細い声で呼んだのだった。『わかった。捨よ。いうてきかしてやる。わしのそばへこい。ここへこい。お前の生れた時の本当のことをいうてきかしてやる。離れておると職人さんに丸ぎこえや。さあ、こい……』

しかし、しゃがみ腰になって下へ降りてきた慈念の右足が足場の丸太にかかった瞬間、角蔵はうしろ足で、その丸太を蹴る。丸太は瓦の上を

転がり、慈念は空に飛んで奈落へ落ちる。『お父ーッ』という声が夜空をつんざく――

慈念のかけた足場の丸太だけ、止め釘が打ってなかったのだが、『落ちたぞッ、落ちたぞッ、捨が落ちたッ』と眼をむいて、とり乱して叫ぶ角蔵の声に集まった人々の眼には、慈念の姿はなく、黒い鏡のような水面には満月が浮いているだけであった。

ただ、その時、池の岸辺の枯葦の中から、バタバタと十数羽の親子雁が飛び立って、一瞬のうちに比良の山の方角に消え去る。そして、三日にわたって行った観智池の^{しゅんせつ}浚渫にもかかわらず、慈念の死体は揚がらず、誰もその行方を知らなかったのである。――

第一部で、孤室庵の襖から切り取られた親子雁は、第四部では生きた親子雁として、観智池を飛び去る――まことに巧妙な物語の設定であり、雁による雲水の象徴化ではないか。したがって堀之内慈念の僧侶像は、△母恋い雁▽とっていいだろう。

(未完)

註 使用作品と引用文は、文芸春秋社（一九七四）刊の文春文庫『雁の寺』（全）に拠った。